

都市農村交流を通じた生態学的な事物連関にひもづく農村建築

および 周辺環境の再生手法

— 千葉県鴨川市釜沼地域を対象として —

塚本由晴^{※1} 貝島桃代^{※2} 佐々木啓^{※3} 林咲良^{※4}

概要 釜沼北集落における里山再生を古民家の改修、棚田の維持管理、山林の整備、茅葺き替えなどを都市農村交流のワークショップとして進め、地域内での物質循環を回復することで里山を再生する方策を探っている。その1つの試みとして、ワークショップ間で共有された事物をつなぎ、包括的な事物連関として里山再生を表現し、生態学的な環境再生手法の指南書をつくる(開発すること)を目的としている。

研究背景と目的

現代における世界的な気候変動やそれに伴う災害の増加は、近代社会の限界や前提を明らかにするとともに、地球環境に対する社会的な関心がかつてなく高めている。建築も例外ではなく、建築のライフサイクルを通じた環境負荷の考慮や地産の建築材料や、それに紐づいた伝統的技術の活用などの観点は建築にとっても不可欠なものとなっている。このように人間と自然の関係を問い直す上で、人の営みと自然の循環が重なり合う領域である里山における農村建築は、暮らしの中で物質循環を均衡させるインテリジェンスを含んでおり、見直されるべき対象である。

千葉県鴨川市の釜沼地区は、東京から最も近い棚田とされる大山千枚田の近隣にあり、現代でも棚田での稲作を中心とした農業そして、茅葺屋根が残る農村集落である。しかし、里山の暮らしや生業を伝えてきた農家たちは高齢化して一線を退き、薪炭林として手入れされてきた森も管理の

手が届かず、獣害による農作物の被害も年々ひどくなるばかりである。こうした危機的状況で里山を維持するために、棚田オーナー制度などの積極的な都市農村交流が行われてきた。2019年には台風15号により多くの家屋が被災したが、この危機を里山再生の機会と捉え、新たなプロジェクトも動き出している。その活動は建築、土木、食、地域経済、生態学、教育など様々な分野の連携による包括的な方法を必要としており、本研究はここに建築デザインの発想を転換する新たな契機を見出している。

本研究の目的は、上記の釜沼地区を対象として、農村における重層的な事物連関を前提に農村建築および周辺環境の再生手法を開発することを目的とする。

研究成果と考察

1:都市農村交流の現状

1994年に「農山漁村余暇法」が制定され、グリーンツーリズムが振興されるなど、近年都市農村交流に注目が集まっている。し

※1 東京工業大学 教授

※2 筑波大学 教授

※3 東京工業大学 助教

※4 明治大学 教授

しかし、観光的要素が強く、農業を成り立たせる環境や風景を維持する過程に都市住民が十分に貢献できていないとは言えない。本研究で研究対象としている釜沼地区でも、古民家を改修した自宅兼交流施設「ゆうぎづか」を運営し、棚田オーナー制度の運営に関わる林良樹氏が、田植えや稲刈りなどをイベント化し、都市住民に開く都市農村交流活動を行ってきた。しかし、棚田などの構築環境を維持し管理する、冬から春にかけての作業や獣を農地に近づけないための草刈りや山林整備などは農村住民によってまかなわれるしかなかった。こうした仕事は、早朝や夕方などのちょっとした時間に各人が行うので私たちは「ちょこっと仕事」と呼んでいる。こうした作業は都市からは見えないものだが、都市住民が理解し、参加できるようにならなければ、里山の環境は維持できないところまできている。収穫や加工などのイベントと並行して「ちょこっと仕事」の参加者を増やすなら、参加者の活動拠点不足も問題になってくる。

2:釜沼の活動

2-1:全体像

釜沼集落では、「ゆうぎづか」の茅葺屋根の葺替えや、棚田では棚田オーナー制度、天水棚田のお米で作る「自然酒の会」が実施され、古民家「けいじ」に移住してきた家族は食べられる森やタイニーハウスビレッジを構想している。(※小さな地球プロジェクト構想マップ)そんな釜沼集落の中央に位置する「したさん」という屋号の古民家が 2019 年に棚田オーナー制度などを通して知り合った人々により、共同購入された。(写真 1)当時、利用方法については明確な指針がなく、運営体制も未整備であったため、「したさん」のあり方について意見・知識交換を行うために、専門家を招待し、シンポジウム(資源的人会議)を開催し

た。第一回資源的人会議では、「したさん」をコモンズとして活用する方法や法的な要件について主に議論し、メンバーシップと場所のリデザインという観点から「したさん」、及びプロジェクト全体の可能性を探る会となった。また、そうした議論を経て「したさん」の共同所有と改修と運営のために一般社団法人「小さな地球」が設立された。(研究代表の塚本は理事を務める)



2-2:古民家「したさん」の改修

2020年7月に、研究代表者塚本と研究室のメンバーで「したさん」の改修を開始し、コミュニティキッチン、ミニキッチン、風呂、ウッドデッキ、蔵ギャラリー、薪小屋等を完成させた。これらの工事には研究室の学生46名が関わり、延265日間作業を行った。

3:古民家再生の3つの手法

農村をめぐる生態学的な事物連関に紐づく農村建築および周辺環境の再生手法を開発することを目的とする本研究では、「したさん」の改修を通して、以下の3つの手法を編み出した。

手法①農的な事物連関を取り込む

[実施ワークショップ(以下WS):外構・土壁・風呂外壁・蔵ギャラリー・茅・石積み]山林や棚田のある中山間地域に位置するしたさんでは、茅場を再生するための水路を掘った際に採取した土を土壁に利用し、集落の電柵を張り替える際の山林整備によって切り倒された杉から杉皮を採取し、

外壁仕上げ材に使用するなど、周辺の農的な事物連関から資材を調達した。



写真 2

手法②ゴミを出さないサルベージデザイン

[実施WS: 建具・下屋外壁・断熱・雨樋・脱衣室・コミュニティキッチン・ミニキッチン・家具]

コミュニティキッチン(写真 2)や家具製作では、使われなくなった建物や家具を丁寧に解体、釘抜き・洗浄・仕分けをすることで、別のものの設計・施工に活かし、これを、できるだけゴミを出さず改修を行うための手法として用いた。サルベージとは、「救出する、引き上げる」という意味で、元々は沈没船の引き揚げ作業などを示す言葉である。文化人類学者のアナ・チンは、このサルベージという言葉を用いて、20世紀の安定した(と思われている)産業社会的連関の中での暮らしに対して、その外側にある一見すると使いようのないものを発見し、経済のネットワークの中に「引き上げる」ことの重要性を指摘し、不安定な現代における生き方の1つとして分析している。^{*1}アナ・チンの分析を参考に、私たちは、この手法に「サルベージ・デザイン」と名付けた。サルベージしたモノたちは、流通に乗せることでそれらが属する里山の連関を未来に繋ぐ契機となりうるため、目録作成を行った。目録にはモノが何として使われていたかだけでなく、回収先の古民家や集落の来歴に対しても行き、モノの背景にある、里山における連関の物語

を見える化した。この成果は修士論文としてまとめられ、日本建築学会で発表済みである。(※論文梗概)



写真 3

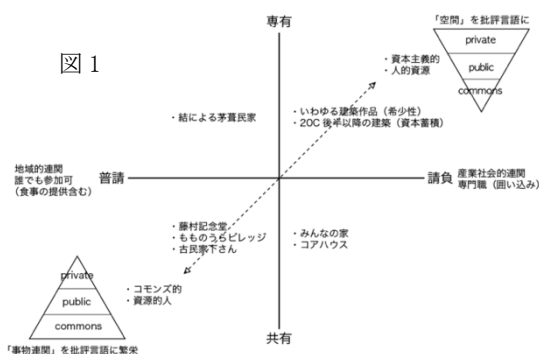
手法③普請型建築

「したさん」の改修は土壁塗り(写真 3)や石積みなどの小さなプロジェクトに分けられ、各プロジェクトは講師として招いた専門家に教えてもらいながら参加者が作業を行うWS形式で行われた。(※WS一覧)WS形式で行うことで、建設を通して参加者はスキルを身につけることができた。これは、現代版の「普請」である。「普請」という言葉は現在、一般的に土木・建築工事という意味で使用されるが、もともとの意味は、「[仏]禅寺で、大衆を集めること。また、あまねく大衆に請うて塔堂の建築などの労役に従事してもらうこと。」であった。^{*2}その後、元禄時代ごろ(17世紀)から武家住宅や民家の建築工事を指す言葉として使用されるようになった。^{*3}普請によって建設されていた当時の民家では、専門的ではない工程には集落内の人も参加していた。そのため、茅葺屋根の葺き替えなどの作業は2月から4月の農閑期に行われることが多かった。また建設に必要な材料は、生木を使用する方法に加えて、「現に立っている家を工事のためにわざわざ「取崩」して古材を得る方法と、何らかの理由で事前に解体されて保管されていた古材を利用する方法」^{*4}があった。このように人手や材料、スキルを持ち寄ってつく

る建築を、「普請型建築」と呼ぶことができる。手法①、②を用いることで市場に流通しない資材を収集することができ、その資材調達には多くの人が参加することができる。これは市場に囲い込まれた請負型の建築にはできない建設のあり方である。また、農村では周辺の建物と距離が保てるため、防火性能の制約から自由であることも流通していない資材の利用、ひいては普請型の建設を可能にしている 1 つの要素である。

4:課題と展望 「したさん」の改修を現在の建築産業との関係においてに位置付けることを試みる。あまねく人々に人手や材料提供などをお願いして協力してもらう「したさん」の改修は、一般的な請負型の建設方法とは対比的である。また、「したさん」は「小さな地球」で共同管理されている共有財であり、専有と対比的である。そこで請負—普請の対比軸を横軸、専有—共有の対比軸を縦軸とした座標を組むと図1のような図を描くことができ、「したさん」の改修は共有×普請の第三象限に位置づけられる。20世紀の資本主義をベースにした社会は、建設のほとんどを専有×請負の第一象限に集中させ建築の工業化や生産性を向上させたが、一方でこのことがもたらす専門化が誰でも建設に参加できる機会を奪い、建設に元々備わっていたコモنزの性格を弱体化させた。専有×請負型の建築では、資本主義のマーケット至上原理のもと、建設にまつわるマテリアルフローなどの事物連関はブラックボックス化されるのに対し、「普請型の建築」の工事は顔の見えるコミュニティメンバーによって行われ、建設後には建物が共有される。そこでは、どのような事物連関の中に建築が位置づいているか、見えるかたちで実体化される。「普請型建築」の特徴には、請負型と比べゆっくりと建てながら住むような建設

のあり方であること、「したさん」のように共有される建物の方が、自邸など専有のものより建設に参加しやすいことなどが挙げられる。第二象限の専有×普請の建築には、かつて集落内の結によって行われていた茅普請などがあるが、現代においては戸数減少等の理由で実現が難しい。茅葺の伝統的な結のメンバーシップは集落内に留まっていたが、本研究で開催した茅葺WSでは海外や関西地方からの参加者がいたように、現代の普請のメンバーシップは国・地域レベルへと領域を広げており、ここに現代における結のあり方を見ることが出来る。また、WSを通して茅葺の知識を得たことから自宅も茅葺にしたいという声も複数あがった。今後の展開としては、第二・三象限の建設を支援するような社会的枠組みを拡張することや、第一象限に石積みや茅葺屋根、土壁、杉皮、薪などを通して農林と連関する生態学的アプローチを組み込むことで建設をめぐる社会性にゆらぎをもたらすことが社会的挑戦であり人々の活力を引き出すことを考察した。



5:まとめ 3つの農村の建築および周辺環境の生態学的な再生手法を開発し、建設の社会性にゆらぎをもたらすイノベーションについて考察した。

参考文献※1: アナ・チン著、赤嶺淳訳『マツタケ』2019、みすず書房※2: 彰国社『建築大辞典』1976、彰国社※3: 新村出編『広辞苑第四版』1998、岩波書店※4: 安田徹也「書評中村琢巳著『近世民家普請と資源保全』」『建築史学 (65)』2015、建築史学会